



かね  
やま  
もり  
ただ  
まさ  
つ  
やま

兼山が生んだ戦国武将

森忠政と津山

・可児市と津山市 歴史友好都市交流二十周年・

津山市

兼山かねやまが生んだ戦国武将  
森忠政もりただまさと津山つやま

・可児市と津山市 歴史友好都市交流二十周年・

目次

ご挨拶	2
第一部 歴史編	
兼山が生んだ戦国武将 森忠政と津山	
一 武門の家 森家	6
二 関ヶ原の合戦	16
三 美作国を拝領	21
四 忠政の最期	26
第二部 交流編	
可児市のプロフィール	30
津山市のプロフィール	31
歴史友好都市交流のあゆみ	
歴史友好都市縁組に関する協約書	32
1. 縁組調印までの経緯	33
2. 機運の高まりと縁組調印	34
3. 歴史友好都市としての交流	37
4. 友好交流20周年記念行事	39

## ご挨拶

平成7年から続く可児市との歴史友好都市の交流は20周年を迎えました。

旧・兼山町との間で結ばれたこの「歴史友好都市縁組」が、それぞれ合併を経てもなお交流が継続していることは、両市にとってこの絆が大切であると認識され、共有されてきた証であります。

美濃兼山の出身である初代津山藩主・森忠政が津山に城と町を築き、現在の津山市の基礎を形作ってからの、長い歴史に裏打ちされた交流、その重さを改めて感じております。

東日本大震災以来、人と人、まちとまちのつながりが改めて見直されるようになりましたが、森家につながった二つの城下町が400年という時を超えて結んだこの絆を今後も大切にし、両市の財産として末永く継承してまいりたいと考えております。

そしてこのたび、20年間の交流のあゆみをまとめた、友好交流20周年記念誌を発刊することとなりました。これは、両市を歴史的につなぐ森家の略歴と、歴史友好都市としての交流のあゆみを広く紹介しています。とりわけ、両市の明日を背負って立つことになる若い世代の皆さんが、本書に目を通していただければ本望であります。

結びになりましたが、この記念誌発刊をはじめとする友好都市締結20周年の記念事業を通じて、両市の交流が市民レベルでますます盛んになり、その絆がいつそう強まることを祈念申し上げます、巻頭のご挨拶といたします。

平成27年10月

津山市長 宮地 昭 範

## ご挨拶

この度は、本市との歴史友好都市提携20周年を記念し、その歩みを記した記念誌が発刊されますこと、心からお礼とお祝いを申し上げます。

可児市兼山で生誕した美濃金山城主・森忠政公が、後に初代津山藩主となられて、津山市のご繁栄の礎を築かれた由縁で、両市の交流が始まってから早や20年が経過いたしました。平成7年の提携以来、歴史を重んじ、友好の親善を深め、交流の促進にご尽力いただきました両市の関係各位に、改めて心からの敬意と感謝を申し上げます。

本年5月に開催いたしました「花フェスタ2015ぎふ・可児市ウィーク」の提携20周年記念イベントでは、貴市の芸能や食文化を通して、津山市の魅力溢れる文化に触れる機会をご提供いただきました。会場内に響く太鼓や華麗な舞など、その勇壮さと華やかさに感動を覚え、津山市の歴史文化の奥深さを、改めて実感させていただきました。

自然、歴史、文化、産業など、先人が築き我々の世代が享受してきた地域の魅力を、将来を担う子どもたちにしっかりと引き継いでいくことが、地域を発展させる礎となって、地方創生の大きな力となっていくものと思います。

両市の子どもたちが、森家につながった400年という長い歴史と20年という貴重な交流実績を知り、自分が住んでいる地域の文化や歴史を誇りとしてくれること。そして、心豊かで、地域を支える成人に育っていかれることを心から願っております。

今回、貴市が発刊される森家の歴史やこれまでの交流を記した記念誌が、両市の絆の証として広く活用されるとともに、将来世代に引き継がれ、両市の交流が今後とも末永く続くことを願ってやみません。

結びに、貴市の益々のご発展と津山市民皆様のご多幸を心からご祈念申し上げ、発刊に際してのご挨拶とさせていただきます。

平成27年10月

可児市長 富田成輝

## 巻頭言 縁を大切に

―妙向尼 菩提弔う 常照寺

冒頭は「み」で始まる「兼山郷土かるた」の一文です。金山城下妙願寺跡（現在の常照寺）と妙向尼さまのお墓への参拝訪問は積年の願いでした。

その日、願いは感動に変わりました。昭和39年（1964）8月下旬のことです。兼山町民の方との縁を得て、名鉄兼山駅のホームに第一歩を踏み出した時、そして駅舎を出て数名の方の出迎えを受けたあの時の感動です。思い出となると美しいことです。

爾来、兼山町との縁ができ、津山から兼山町を訪問したこと、そして兼山町からの訪問を妙願寺としてお受けしたこともたびたびありました。兼山町訪問の中でも昭和45年（1970）の「町主催」の「森可成公400回忌法要」に城主系の当主森可久氏ご夫妻とともに参列したことは強く印象に残っています。縁組を予見する思いともいえます。

時は友好友情を無視しません。「森忠政公ご生誕の地を訪ねたい」という永礼達造津山市長（当時）の願いが伝えられ、事前に渡辺芳彦兼山町長（当時）を単身訪ねたのは平成7年（1995）3月初めのことでした。永礼市長ほか十数名の市関係の方を案内して3月下旬に兼山町を訪問、兼山町から渡辺町長ほか十数名が中尾嘉伸津山市長（当時）を7月上旬表敬訪問、そして10月16日に津山市と兼山町の歴史友好都市縁組が成立し、当日調印式が兼山町で行われました。兼山町はその後可児市となり、ここに歴史友好都市縁組締結20周年を迎えました。

かつて永礼市長と兼山訪問の際、子供たちにも友好の輪をということで、津山の高倉小学校と兼山小学校が姉妹校となり「方言」の勉強をしてはと提案しました。森公顕彰という土壌のもとで、教育・文化・産業・経済等のジャンルで両市の接点を見出し、歴史と友好の絆を強めてほしいと思います。縁組成立20周年おめでとうございます。両市の発展を念じ申し上げます。

平成27年10月

妙願寺住職 森 嵩 正

第一部  
歷史編



森忠政



森長可

# 兼山が生んだ戦国武将 森忠政と津山

## 一 武門の家 森家



### 由緒ある武士の家、森家

津山の城と城下町を作った大名として、津山では、森忠政の名前は広く知られています。では、森忠政は、どのような時代のどのような家に生まれ、どのような生き方をしながら、江戸時代の美作の国主にまで成長したのでしょうか。

森忠政の生まれた森家は、源氏という古くからの由緒ある武士の一族の系譜につながる家です。そして八〇〇年ほど前のある時期、相模国森庄（神奈川県厚木市付近）を領地として持っていたことから、森の姓を用いるようになりました。

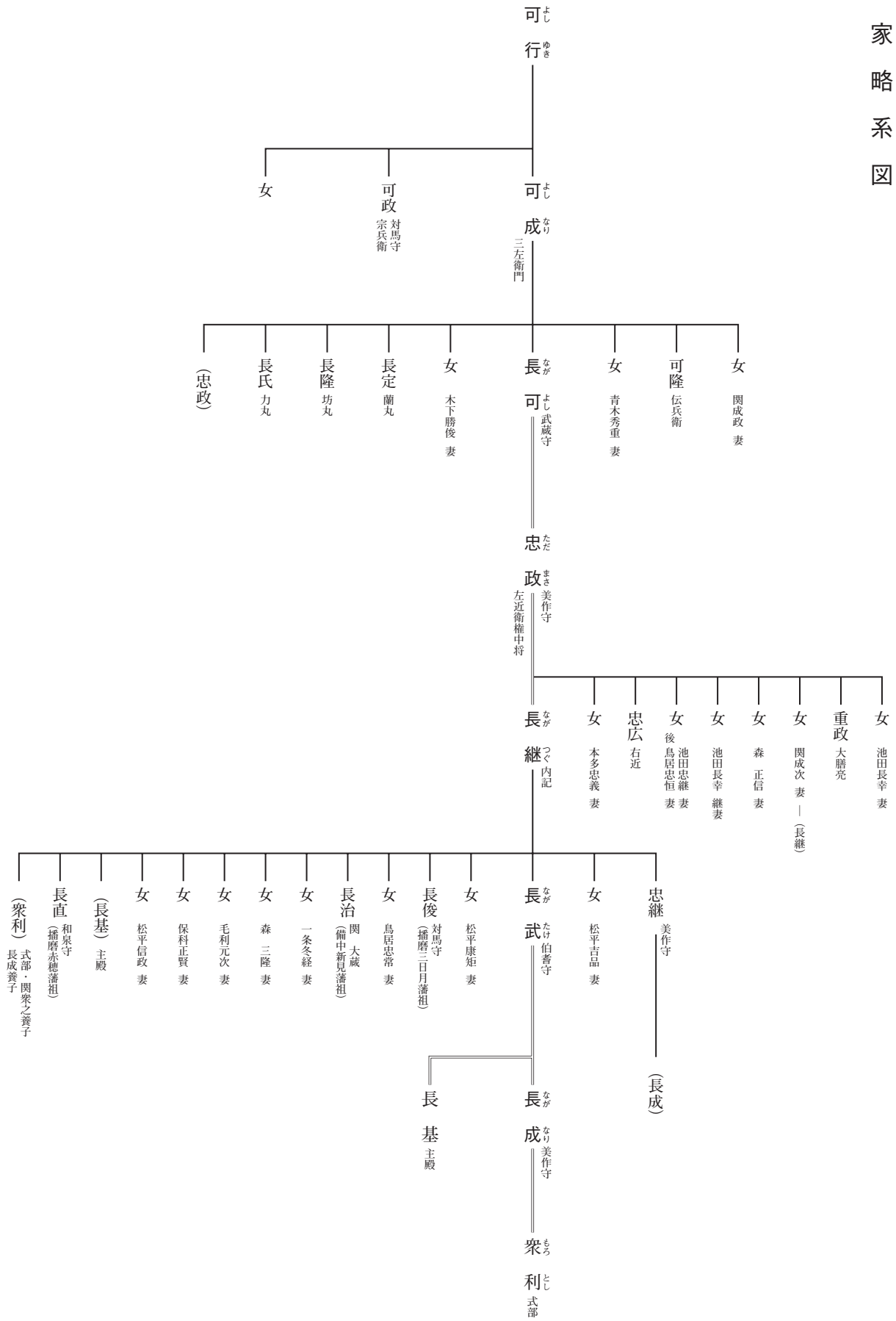
後に、森家一族は、美濃国（岐阜県）と尾張国（愛知県）の国境付近の地に移り住みました。そして、十六世紀中頃の森家は、美濃国の土岐氏という武将の家来でしたが、土岐家が滅ぶと、尾張国の織田家に仕えました。

森家というのは、ずっと昔から続いている家だったんだ。

津山のあちらこちらで鶴のマークが見られるのは、森家の家のしるしだったからなんだ。



○森家略系図







織田信長画像 兵庫県立歴史博物館



金山城跡、本丸跡（岐阜県可児市兼山）

森可成と金山城

尾張国全体を領地とすることに成功した織田信長は、永禄七年（一五六四）八月、美濃国に攻め込み、犬山城と烏峰城を攻め落としました。そして、烏峰城は、翌年の永禄八年（一五六五）、忠政の父となる可成に与えられました。烏峰城を与えられた可成は、その名を金山城と改めました。この城が、現在、岐阜県可児市兼山に残る兼山城なのです。実は、古くは「金山」と書いていたのですが、今は、兼山と書きます。ややこしいのですが、この本の中で歴史を紹介する時は、古い用語の「金山」という表記を使います。



森長可画像（複製） 可児市教育委員会

織田信長からお城をもらうなんて、忠政のお父さんは、すごいね。





金山城跡



金山城跡

森忠政の誕生と森家の棟梁長可

元亀元年（一五七〇）、忠政は、美濃国金山（岐阜県可児市兼山）に生まれました。金山は、木曾川の深い渓谷に面した細長い町で、山と谷に挟まれています。田畑となる平地は少ないのですが、木曾路の出入り口にあたり、交通の要衝として栄えました。

忠政の幼い頃の名前は、千丸といいました。千丸の生まれたこの年、信長は近江国（滋賀県）の朝倉氏を攻めました。そして、千丸のお父さんの可成とお兄さんの可隆が、ともにこの時の戦で討ち死にしました。そのため、二番目のお兄さんの長可が可成の跡を継ぎ、金山城の城主となりました。

十七歳となった長可は、天正二年（一五七四）、信長に敵対していた一向一揆の拠点となっていた長島城（三重県桑名市）攻めに出陣しました。これが、長可の初陣とされています。その後、天正三年（一五七五）には、長篠（愛知県新城市）の戦いに出陣、また、天正六年（一五七八）には豊臣秀吉に従って播磨国三木城（兵庫県三木市）を攻めました。また、その年の暮れには、有岡城（兵庫県伊丹市）の荒木村重を攻めています。こうして長可は、信長の元で武名を上げていきました。



森可成墓所（可成寺）



可成寺（岐阜県可児市兼山）



すごいで  
きごとに、  
森家もかか  
わっていた  
んだね。

本能寺の  
変は、歴史  
の教科書に  
ものつてる  
よ。



## 本能寺の変

天正十年（一五八二）、信長の長男の織田信忠のふただに従っていた長可は、信濃国（長野県）を攻め、武田氏いちぞくの一族を滅ぼして、川中島の海津城（長野県長野市）に入りました。この時、長可は信濃国の川中島四郡（更級・高井・水内・埴科）を新しい領地として与えられ、金山の七万石と合わせると二〇万石以上の大名になりました。

その頃、千丸（忠政）は、お母さんの妙向尼みまうにとともに、信長の建てた新しい時代の象徴となる城、近江国の安土城（滋賀県近江八幡市）にいました。そして、六月二日を迎えたのです。それは、歴史上有名な本能寺の変の日でした。千丸は、十三歳でした。まだ、信長に仕え始めたばかりであったといえます。この本能寺の変で、信長が、京都本能寺において、明智光秀あけちみつひでに討たれた時、信長の側に仕えていた千丸のお兄さんたち、蘭丸・坊丸・力丸の三人も命を落としました。千丸は、信長の共を命じられず、安土城に残ったので助かったのです。

しかし、安土城も決して安全な場所ではありませんでした。いつ明智方の軍勢ぐんぜいに攻められるか分かり



森坊丸・森蘭丸・森力丸墓所（可成寺）

妙向尼画像 妙願寺



ません。生命の危機に直面していた千丸と妙向尼でしたが、甲賀（滋賀県甲賀市）を根拠地とする伴一族の素早い行動によって、無事に救い出されました。ふたりは、伴一族の手厚い保護を受け、特に千丸は、甲賀の子供達と遊びながら安全に過ごしたと言われています。

一方、川中島の海津城にいた長可は、京都での異変を知ると直ちに海津城を引き払い、美濃国金山へと帰ってきました。その後、川中島は、上杉景勝の支配下に入りました。金山に帰った長可は、甲賀に迎えるの使者を送り、妙向尼と千丸は、無事、金山へと帰ることができたのでした。

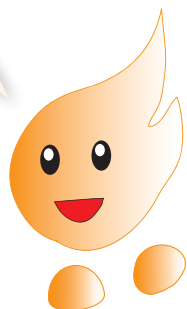


常照寺（岐阜県可児市兼山）



妙向尼墓所（常照寺）

甲賀といえは忍者。もしかして忠政は、こどもころに忍術の勉強もしたのかな。



※長可は鬼武藏と称されていた。



武蔵塚（愛知県長久手市）

### 忠政、森家の当主となる

織田信長が亡くなった本能寺の変から二年後、天正十二年（一五八四）のことでした。森長可は、織田信長に続いて天下取りを目指していた豊臣秀吉に仕えていました。豊臣秀吉軍は、対立していた織田信雄と徳川家康の連合軍との戦いとなり、長可は、小牧・長久手（愛知県小牧市・長久手市）の戦いで討ち死にをしてしまいました。二十七歳の若さでした。この時、長可は、戦乱の世の厳しさから、歳の離れた弟の千丸（忠政）を跡継ぎにはしたくないという遺書を残していました。

しかし、長可が亡くなったため、十五歳の千丸は、秀吉から家督の相続を認められ、金山七万石の領主となりました。

この年、秀吉は、朝廷から従三位権大納言という高い位を与えられました。そして、これ以後、秀吉は異例の昇進を遂げていき、名実共に天下人への道を歩んでいきました。

そうした中で、森家の当主となった忠政は、天正十三年（一五八五）八月、秀吉が富山城（富山県富山市）の佐々成政を攻めることになると、十六歳にして初めて戦に出陣し、初陣を飾りました。



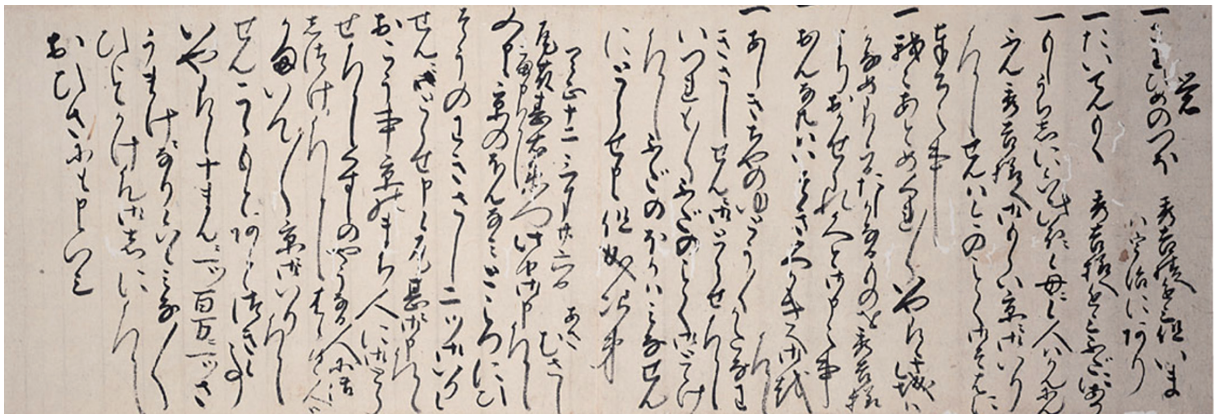
森長可墓所（可成寺）



木造森忠政公坐像 本源寺



これが、  
忠政のお兄  
さんの遺書  
なのか。な  
に書いて  
あるのや  
ら、ぜんぜ  
んわかな  
いや。



森長可遺言状 名古屋市博物館

## 様々な戦

天正十五年（一五八七）二月、忠政は、従四位下に進み侍従となり、豊臣家の一族と同じ羽柴の称号を与えられました。そして、三月、秀吉は、争っていた家康との和解に成功しました。そこで、秀吉は、九州の島津義久を討つために大坂を出発しました。この九州攻めでは、忠政は病気のため出陣できず、代理として林長兵衛為忠が出陣しました。五月には、九州は秀吉の勢力下に入りました。

天正十八年（一五九〇）になると、秀吉の大軍は、小田原城（神奈川県小田原市）の北条氏に攻めかかりました。忠政は、小田原攻めの一貫として、三月二十九日から、福島正則・生駒一正らとともに、北条氏規の守る伊豆の韮山城（静岡県伊豆の国市）を攻めています。そして、激しい攻防の末、六月に至ってようやく攻め落としました。

文禄元年（一五九二）には、朝鮮半島への出兵が現実のものとなりましたが、忠政が命ぜられたのは、出兵の拠点となる肥前国名護屋城（佐賀県唐津市）の造営が中心で、忠政自身が朝鮮半島に渡ることはありませんでした。



豊臣秀吉像 名古屋市秀吉清正記念館



戦国時代というのは、ほんとうに戦いの時代なんだね。たくさんさんのいくさを戦いながら、忠政は出世していったんだよ。

## 豊臣秀吉の死と伏見騒動

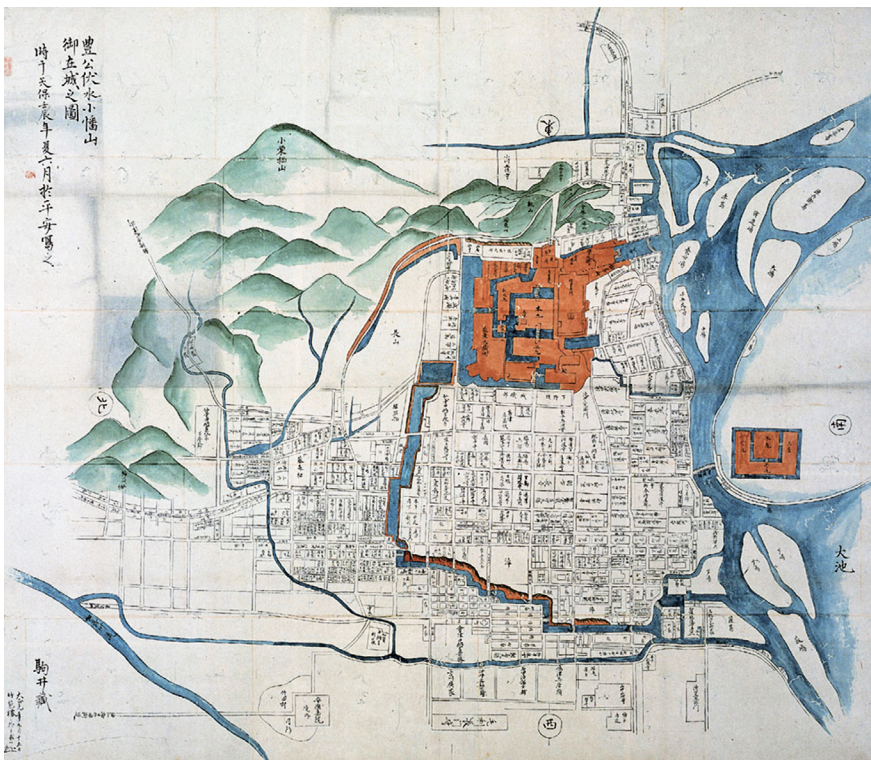
慶長三年（一五九八）八月、秀吉が、伏見城（京都市伏見区）で亡くなりました。豊臣家の存続を揺るがすような大きな出来事でした。そして、世の中の全てが、動き始めました。その中心は、豊臣家を守ろうとする石田三成と、秀吉に続いて天下を取ろうとする徳川家康でした。

この頃、石田三成が、伏見にいる家康の暗殺を企てているとの噂が流れました。忠政は、他の一部の大名と共に、家康の元に駆けつけ、身辺警護にあたりました。

この伏見騒動での行動により、忠政は、家康の深い信頼を得ることになりました。家康自らが忠政の手を握り、「自分の家が続く限り、この忠義の心は忘れない」と言ったと伝えられています。

この時に、家康側に付くことに決めた忠政の判断は、その後の森家の運命を決する大きな決断となりました。

お酒で有名な伏見に、こんな大きな城下町があったなんて、びっくり。そこには、忠政の屋敷もあつたんだね。



豊公伏見小幡御在城之図 宇治市歴史資料館





そうだよ。  
家来たちもみ  
んな一緒だか  
ら、たいへん  
な引越しな  
んだ。

森家は、徳  
川家康のめい  
れいで、川中  
島に引越し  
ただね。



## 二 関ヶ原の合戦

森忠政の川中島転封

慶長五年（一六〇〇）二月一日、忠政は、美濃国金山七万石の領主から、信濃国川中島（長野県長野市）十三万七千五百石に転封となりました。川中島では、埴科、更級、高井、水内の四郡が領地として与えられました。これは、かつて兄長可が獲得していた領地でした。

川中島では、上杉景勝が会津（福島県）百二十万石へ転封となった後、田丸忠昌が海津城に入り四万石を領していました。この田丸と入れ替えるような形で海津城に入った忠政でしたが、金山で七万石だった忠政に大きく加増された領地は、その多くが豊臣家の領地である蔵入地でした。この時、忠政の加増転封を命じたのは、豊臣家の家臣である徳川家康でした。そのため、豊臣家が支配する政権の中において、家康が勝手に行った行為であるとされました。そして、森忠政の転封は、単に家康の勝手な行為ということに留まりませんでした。少なくとも、徳川家康と敵対する石田三成は、豊臣家の蔵入地をかすめ取った者として、忠政を豊臣家にとって許すことのできない敵と認識したのです。



松代城跡（長野県長野市）

## 忠政の出陣

慶長五年（一六〇〇）三月、忠政は、家臣を引き連れて、金山から川中島に移りました。海津城（松代城）に入ったばかりで、新しい領地をこれからどのように支配していくか、多くの仕事に追われる中でしたが、忠政は、家康の跡継ぎである秀忠にしきりに書状を出していました。そして、京都に上るようという豊臣家の命令を拒否している会津の上杉景勝を、いつ討伐するのかわからない情報収集にとめていました。ちなみに、この頃から関ヶ原（岐阜県不破郡関ヶ原町）の戦いが終わるまでの多数の書状の中で、秀忠は、忠政の宛名として「羽柴右近」を用いていますが、家康は、宛名を「川中島侍従」とし、豊臣家ゆかりの「羽柴」を用いることはありませんでした。

七月十九日になると、上杉討伐に向けて、秀忠が江戸城を出発しました。この秀忠の動きに合わせて、忠政も川中島を出発し、七月二十一日には宇都宮（栃木県宇都宮市）に着陣しました。

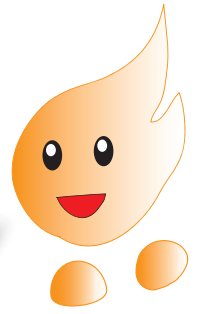
江戸にしばらく滞在していた家康は、七月二十四日、小山（栃木県小山市）に到着しました。この時点で、家康と敵対している大坂方の活発な動きは、次々と知らされてきました。家康を討ちたいと考えていた石田三成は、家康が関東にいる間に、大坂や京都で家康との戦いの準備を進めていたのです。



徳川家康画像 三河武士のやかた家康館

だれがだれを、なぜせめるのか、なんだか、よくわからないなあ。ゆっくり、考えてみよう。





小山評定も有名だけど、歴史の話では、小田原評定というのもあるよ。知らない人は、おとなの人にたずねてみよう。

家康個人の戦ではなく、豊臣家の軍勢として出陣していた上杉討伐軍に加わっていた真田昌幸も、前日の二十三日には、家康方を離れて大坂方の西軍に呼応するため、下野国犬伏（栃木県佐野市）から上田城（長野県上田市）に向けて出発していました。そして、二十五日、家康は諸将を小山に集めて評定を行い、上杉討伐を中止して、石田三成の西軍と戦うことを決定しました。

### 忠政、川中島へ帰る

いわゆる小山評定の行われたその日、忠政は、川中島に帰ることとなりました。このことについては、秀忠が忠政に出した書状の中で、忠政の眼病を心配しているので、忠政の帰国は眼病が原因で軍勢から離れたと考えられたこともありました。しかし、この頃の家康は、その書状の中で、信州（長野県）方面における忠政の役割が大変重要であると述べているので、実際は、家康方に敵対する上田城の真田昌幸に対応するため、急ぎ川中島に帰ったと考えられます。

川中島に帰った忠政は、信州方面には特に変わった事がないことを秀忠に報せており、家康の上洛に同道したいと申し出ているのですが、忠政が守っているのは重要な「境目之事」であるので、上洛を急ぐことはないとの指示でした。



上田城跡（長野県上田市）

## 忠政、上田城を攻める

中山道からの上洛のため、家康軍と離れて信濃に向け、八月二十四日に宇都宮を出発した秀忠軍は、九月一日、軽井沢（長野県北佐久郡軽井沢町）に入り、二日には小諸（長野県小諸市）に入りました。

そして、九月五日、秀忠の率いる軍勢は、上田城に攻めかかりました。秀忠軍は、約三万八千人。一方、上田城の真田軍は、約二千五百人。しかし、上田城は、容易には落ちませんでした。この時、上田城は完全に包囲されていました。忠政は、川中島から千曲川沿いに兵を進め、西から上田城に迫っていました。

ところが、上田城攻めに手こずっていた秀忠は、東海道から軍勢を進めていた家康から、至急上洛するようにとの指示を受け、直ちに上田を出発しました。秀忠の命令を受けて上田城の押さえとして残された忠政は、繰り返し返し上洛の希望を秀忠に伝えましたが、既に焦りを感じていた秀忠は、忠政を待つ余裕はなく、決戦の場所関ヶ原へと急いだのでした。



もうすぐ、関ヶ原の合戦だ。でも、忠政は、上田城を攻めているんだね。これから、どうなるのだろう。

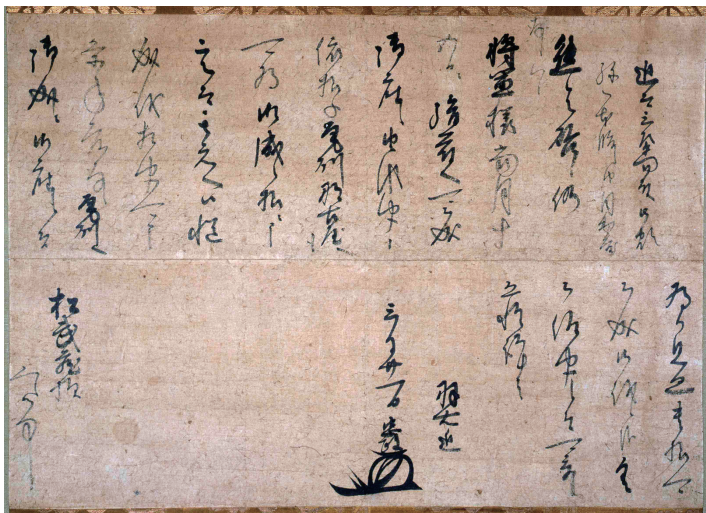


残念だったね。でも、忠政がしつかりはたらいたことは、家康や秀忠にもちゃんとわかっていただんだよ。

### 忠政の関ヶ原

こうして、上田に残される事への不安に駆られた忠政が、頻繁に秀忠や家康との書状を遣り取りする内に、関ヶ原での合戦は、家康方の勝利であっけなく終わってしまいました。忠政としては、関ヶ原の合戦に参加できなかったことが悔しかったに違いありません。しかし、結局、合戦後も、忠政が上洛することはできませんでした。天下分け目の合戦という晴れ舞台に登場することなく、忠政の関ヶ原は終わりました。

忠政が川中島四郡を支配していた当時の領内の様子は、詳細には分かりません。ただ、忠政は、領内の田畑の様子を調べるため、慶長七年（一六〇二）に検地を行っているのですが、農民にとってはかなり厳しい数字を打ち出したと言われています。この時の検地は、非常に過酷な検地であったとされ、川中島では、「右近竿」として語り継がれています。



森忠政書状 個人蔵

### 三 美作国を拝領

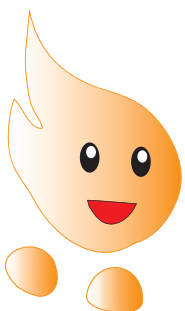
美作の国主、森忠政

慶長八年（一六〇三）二月六日、忠政は、伏見城において美作国十八万六千五百石を与えられ、美作一国の国持ち大名となりました。俗に言う「一国一城の主」です。徳川家康が將軍となる六日前、忠政三十四歳の春のことでした。

忠政にとって美作国は未知の世界でした。徳川家から領地として与えられたと言っても、地元には古くからの土豪や、前の領主の小早川氏や宇喜多氏ゆかりの勢力が残っていて抵抗することも予想されました。忠政は、まず先発隊を派遣して、美作地域の様子を探り、その後、慶長八年（一六〇三）の三月に美作国に入ったとされています。

当時の様子を伝える軍記物によれば、忠政の入国を阻止するべきだとして多数の武士が集結したのですが、徳川の揺るぎない力を背景に入国する忠政に抵抗することは、すなわち徳川幕府に抵抗することになるとして断念したという話が伝えられています。

美作国に入り、ひとまず院庄の構城に居を定めると、忠政は、領国内を探索して新しい城と城下町の候補地を探しました。



いよいよ、忠政の津山での大仕事が始まるよ。これから、新しい国づくりをするんだ。江戸時代の新しい町や村ができるんだよ。



正保美作国絵図 個人蔵

江戸時代のはじめころの美作国全体の絵図だね。郷土博物館に行けば、壁いっぱいので、よく見えるよ。





津山の城下町ができるまえから、多くの人が集まって買物をしてきたなんて、びつくりだ。

## 鶴山と戸川町

「建武の比、美作国西北条郡鶴山、小篠山トモ云、の南二当り留川とて清浄の流れアリ。(略) 戸川町・林田町も有り、毎月朔望二八国中の人民群集ヲなし、戸川の市とて売買ヲなす」

これは、十九世紀の初め頃に編纂された『森家先代実録』に載せられた、江戸時代以前の津山の様子を伝える最もよく知られた伝承です。その意味は、次の様になります。

「建武の頃(一二三三四～一二三三七) すなわち足利尊氏が室町幕府を開いた頃、美作国の津山に鶴山という山があり、それは別名小篠山とも呼ばれていた。その南に留川(戸川)という清浄な川があった。付近には戸川町や林田町があつて、毎月一日と十五日には戸川の市と呼ばれる市がたち、美作国の人々が群集を成して集まり様々な商品の売買をした。」

ここに描かれている津山の様子は、忠政が美作国に入る二百数年も前の姿ですが、忠政が入った頃も大きくは変わっていないと考えられます。こうした川の側の町場を麓にして、鶴山の中腹には福聚山妙法寺があり、その門前には門前町があつたということです。



津山城跡 (津山市)





津山城備中櫓

うわっ。津山城  
は、すごい立派な  
城だったんだ。



### 津山城の築城

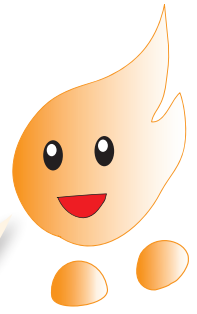
慶長九年（一六〇四）春、吉井川と宮川の合流点を見おろす小高い鶴山を城地と定めた森忠政は、まず「鶴山」の名称を「津山」と改めたといえます。そして、その年の秋には斬始めとして、徳守神社の社殿を造営して城下町の物鎮守としました。こうして、美作の歴史上空前の築城工事が開始されたのでした。

築城に当たって忠政は、大工の保田惣右衛門を豊前国小倉（福岡県北九州市）に派遣しています。そして、伝承では、要害堅固と言われた小倉城の縄張を記録して帰り、津山城の縄張に生かしたというのです。また、森家の記録では、小倉城の天守を図面にして持ち帰り、津山城の天守建設の参考にしたと伝えられています。これが事実とすれば、当時の小倉の城主細川忠興は、忠政とは合戦や茶の湯を通じての懇意な間柄だったので、協力が得られたものと思われれます。

こうして長年にわたる大工事を経て津山城が完成すると、細川家からは城普請完成の祝いとして、「篇笠形の釣鐘」が忠政の元に贈られています。この釣り鐘は、江戸時代を通じて津山城の天守に架けられていましたが、現在は、大阪の南蛮文化館に所蔵されています。



津山城復元CG



江戸時代の人には、武士や町人という区別があった。だから、その区別によって住む場所がちがっていたんだ。絵図では、色で区別してあるね。

### 城下町の建設

慶長九年（一六〇四）、津山城建設に着手した忠政は、同時に城下町の建設に取り掛かりました。しかし、城下町予定地である鶴山の南の麓は、ほとんど吉井川との高低差がないため、城下町の建設には、まず長大な堤防を築くことが必要でした。堤防や道路のための大土木工事が進められる一方で、城下町には周辺の村々から数多くの商人や職人が移住してきて店を構えていきました。城下町に住む人々の中には、遠くは美濃国（岐阜県）から忠政に従ってきた人々もありました。こうして出来上がった町には、福渡町・勝間田町・坪井町・美濃職人町など、出身地の地名をそのまま町名としたものも多くあります。

城下町への移住は商人や職人ばかりではなく、武士や寺院なども城下



津山城下町絵図 津山郷土博物館



城下町がで  
きると、多く  
の人の暮らし  
を支えるため  
に、さまざま  
な商品が運ば  
れていた。高  
瀬船という船  
も使われてい  
たよ。

へと移ってきました。武士は、田町・椿高下・上之町といった  
付近に屋敷を構えました。南新座付近には、妙法寺（鶴山から  
移転）、妙勝寺（神戸村から移転）、本行寺（林田村から移転）  
などが移転して来て、寺町ができていました。

また、元和三年（一六一七）春には、南新座に武士町が出来  
上がりました。それ以前に南新座にあった数々の寺院が、西寺  
町に移転した後に、新たに武士町を設けたのでした。この頃に  
なると、津山にもようやく城下町の形が見え始めていました。  
宮川と藺田川に挟まれた内町と言われる中央部が整ってくる  
と、町並みは宮川や藺田川の外にも広がっていきました。こう  
して、東西に広がる外町ができていきました。

#### 四 忠政の最期

忠政、京都に卒す

津山森藩の初代藩主として美作国を統治し、壮大な津山城を  
築いた忠政は、寛永十一年（一六三四）、京都でその生涯を閉  
じました。六十五歳でした。

七月一日、三代将軍家光の上洛に従うため、忠政は体調を  
崩したまま、京都での宿所となっていた小川通妙堅寺に入り

旅人のた  
めの道路  
も、きちん  
と作られて  
いったんだ  
ね。





本源寺（津山市）

ました。そして、七月六日、京都の豪商大文字屋宗味宅の屋敷での御馳走で食あたりを起こし、翌七日に亡くなったと伝えられています。忠政の遺骸は、京都の船岡山の麓で火葬にされ、龍宝山大徳寺院内の三玄院に葬られました。

津山城を築き、その城下町の基礎を固めた忠政は、城下町の発展の途中で世を去りましたが、その後も、城下町は拡大し、美作の中心にふさわしい新たな都市計画に基づいた近世都市が形成されました。

武を誇る森家に生まれ、織田信長から豊臣秀吉を経て徳川家康まで、天下取りに関わった三人の武將に仕えることにより、戦の続く戦国の世から、政治的な秩序と安定の時代へと、大きく変わっていく中を巧みに生き抜いた忠政は、時代の流れを見抜く慧眼の持ち主であったと言えるでしょう。

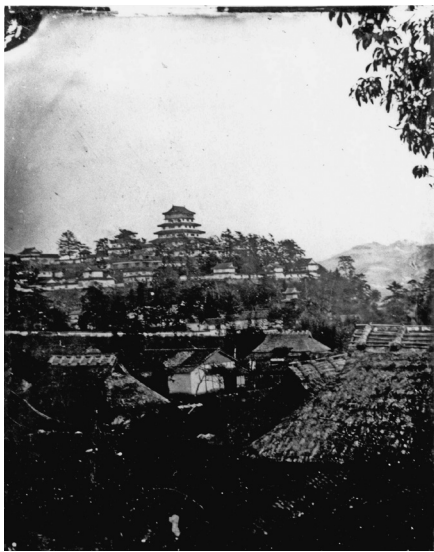
忠政や森家の人たちのお墓は、可児市と津山市だけではなく、京都や高野山にもあるよ。どこにあるか、調べてみるとおもしろいよ。



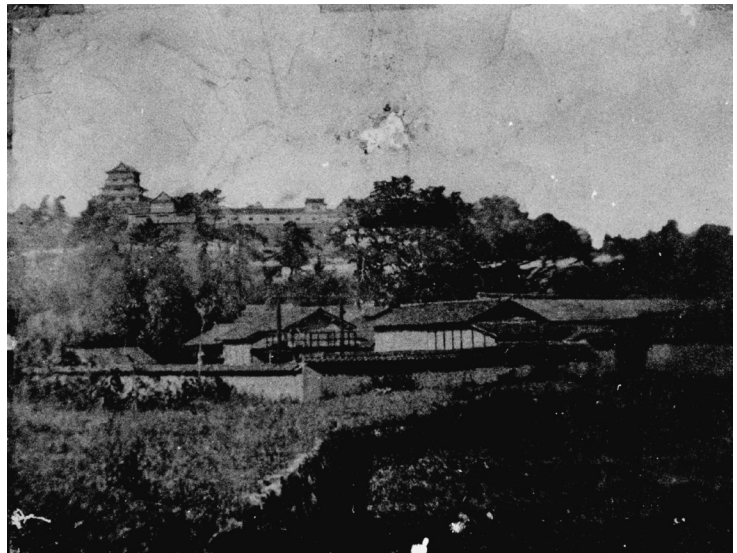
森忠政墓所（本源寺）



津山城古写真 西北から



津山城古写真 西北から



津山城古写真 南から



兼山町議会 平成7年9月定例会

## 第二部 交流編



津山市議会 平成7年9月定例会

# かにし 可児市のプロフィール

市制施行…昭和57年（1982）4月1日

※旧兼山町の町制施行…明治22年7月1日

市の花…サツキ・バラ（町の花…ツツジ）

市の木…クロマツ（町の木…ケヤキ）

面積…87.57km<sup>2</sup>（面積…2.61km<sup>2</sup>）

人口…100,664人（平成27年4月1日現在）

世帯数…39,644世帯（〃〃）

岐阜県中南部に位置する可児市は、名古屋市および県庁所在地の岐阜市から30km圏内にあり、北部はおおむね平坦で、南部は県下最大級の工業団地、住宅団地やゴルフ場が点在する丘陵地となっています。また、市の北端部には日本ラインとして名高い木曾川、中央部には東西に流れる可児川があり、豊かな自然環境に抱かれています。

昭和57年4月1日、全国650番目の市として市制を施行しました。その後、平成17年5月1日には、兼山町と合併し人口も10万人を超え、可茂地域の拠点都市として発展をしています。



# 津山市のプロフィール

つやまし

市制施行：昭和4年（1929）2月11日

市の花：サツキ・サクラ

市の木：クスノキ

面積：506.36 km<sup>2</sup>

人口：104,108人（平成27年4月1日現在）

世帯数：44,647世帯（ ）

岡山県の北東部を占める津山市は、県庁所在地の岡山市の北方約50 kmにあり、北は鳥取県との県境をなす中国山地、南は吉備高原の丘陵地帯に接して形成された津山盆地と呼ばれる盆地帯に位置しています。県下三大河川の一つである吉井川が市域南方の市街地を西から東へと貫流し、都市と自然が融合する表情豊かな地域です。

昭和4年2月11日、津山城下とその周辺部の2町4村が合併して市制を施行。昭和の数度の合併と平成の市町村合併を経て、人口は10万人を超え、県北最大の都市として発展しています。





## 歴史友好都市交流のあゆみ

### 歴史友好都市縁組に関する協約書

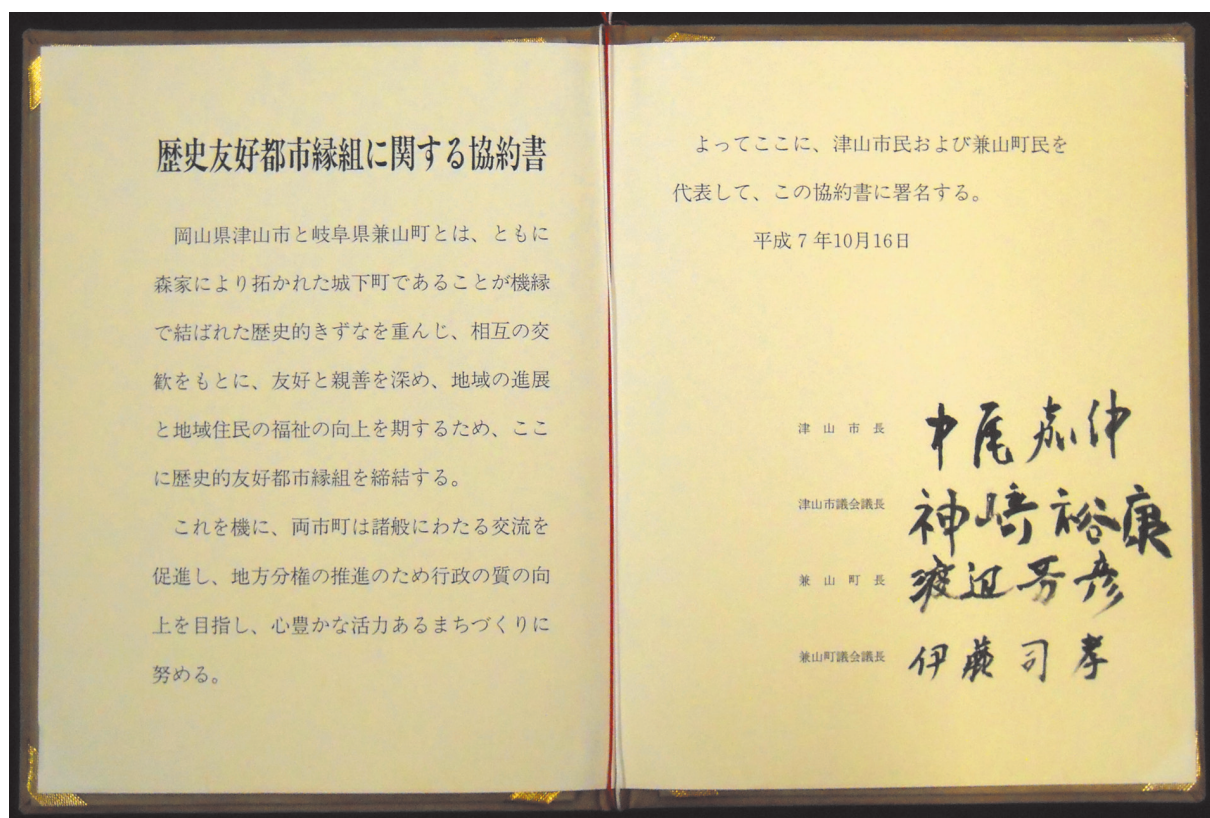
岡山県津山市と岐阜県兼山町とは、ともに森家により拓かれた城下町であることが機縁で結ばれた歴史的きずなを重んじ、相互の交歓をもとに、友好と親善を深め、地域の進展と地域住民の福祉の向上を期するため、ここに歴史的友好都市縁組を締結する。

これを機に、両市町は諸般にわたる交流を促進し、地方分権の推進のため行政の質の向上を目指し、心豊かな活力あるまちづくりに努める。

よってここに、津山市民および兼山町民を代表して、この協約書に署名する。

平成7年10月16日

津山市長	中尾 嘉伸
津山市議会議長	神崎 裕康
兼山町長	渡辺 芳彦
兼山町議会議長	伊藤 司孝



## 1. 縁組調印までの経緯

○昭和39年（1964）9月

津山の妙願寺住職森嵩正氏が初めて兼山町を訪問。兼山町文化財委員などと懇談、交際が始まる。

○昭和44年（1969）11月

妙向禅尼の画像を安置する妙向堂が妙願寺に建立。その落慶式に、兼山町から町長代理として教育長、文化財委員長が参列し、津山市長、津山科学教育博物館長をはじめ多くの関係者と交流を深める。

○昭和45年（1970）5月

森可成400回忌が兼山町の可成寺で行われ、妙願寺住職森氏が参列。

○昭和47年（1972）4月

森忠政公入封370年祭が津山市主催で行われ、兼山町長、教育長が参列。1週間後には、兼山町史跡保存会主催の親善観光団の一行50名が津山を訪問し、関係者と交流。

○昭和58年（1983）11月

忠政公350年忌法要が妙願寺で行われ、兼山町長夫妻が参列。

○昭和63年（1988）4月

兼山町が町制100年を記念して、町のシンボル「金山城」の城主森家ゆかりの地を町民に訪ねてもらおうと企画した歴史ツアーの一行39名が津山を訪れ、津山城跡、妙願寺、津山歴史民俗館等を見学、関係者と交歓。

○平成元年（1989）2月

妙願寺住職森氏と仏教青壮年部会の一行17名が兼山町を訪ね、町長をはじめ関係者の歓迎を受け、親しく懇談して旧交を温める。

## 2. 機運の高まりと縁組調印

—平成7年(1995)—

○1月26日

津山市と兼山町との歴史友好都市縁組締結に関する要望書を、妙願寺住職森嵩正氏・歎異鈔に聞く会会長鍋島英夫氏が永礼達造津山市長へ提出。

○2月下旬

妙願寺住職森氏から兼山町長宛に書簡が出され、森家による約400年の歴史的きずなにより、兼山町と友好縁組を結びたいとの津山市の意向が伝えられる。また電話により、縁組についての相互の意向が確認される。

○3月上旬

妙願寺住職森氏、兼山町を訪問し、渡辺芳彦町長らと面会。また、別に津山郷土博物館の職員も兼山町を訪問して、関係者と交流。

○3月22日・23日

永礼市長をはじめ津山市の関係者14名が兼山町を訪問し、渡辺町長らと懇談。友好都市縁組が提案され、両市町の友好交流を深めることを確認。



○7月5日・6日

渡辺町長をはじめ兼山町の関係者13名が津山を訪れ、中尾嘉伸津山市長らと懇談し、両市町の歴史友好都市縁組について合意。

○8月29日・30日

津山市の担当職員が兼山町を訪れ、縁組調印について打ち合わせ。

○9月25日

両市町の定例議会にて「津山市と兼山町との歴史友好都市縁組について」の議案を同時議決し、市長と町長および両議会議長がメッセージを交換。

○10月15日・16日

津山市から、中尾市長をはじめ市役所・各界の関係者40名が兼山町を訪問。16日に歴史友好都市縁組調印式を開催。両日にわたって、レセプション・記念植樹・記念パーティー等の関連行事が盛大に行われる。



●10月16日 調印式次第

午前10時開式 会場：兼山町総合会館ふれあいホール

1. 開式のことば  
兼山町助役 水野嗣雄
2. 君が代斉唱
3. 式 辞  
兼山町長 渡辺芳彦  
津山市長 中尾嘉伸
4. あいさつ  
津山市教育長 水野壽夫
5. 歴史友好都市縁組経過報告  
兼山町教育長 神崎裕康
6. 議決書・記念写真交換  
津山市議会議員 伊藤司孝  
兼山町議会議員 中尾嘉伸
7. 調 印  
津山市議会議員 神崎裕康  
兼山町長 渡辺芳彦
8. 協約書朗読  
兼山町議会議員 伊藤司孝
9. 市旗町旗贈呈  
津山市助役 井口正一  
津山市長 中尾嘉伸  
兼山町長 渡辺芳彦
10. 来賓祝辞  
岐阜県選出国會議員  
岐阜県知事  
岐阜県議会議員
11. 来賓紹介
12. 祝電披露  
兼山町議会副議長 川合祐司
13. 閉式のことば

その後、11時15分から総合会館ふれあい広場にて、記念植樹。



### 3. 歴史友好都市としての交流

○平成8年（1996）3月31日

兼山町から常照寺の門徒が津山市を訪問、妙願寺を参拝。

○平成8年4月7日・8日

兼山町から「津山ご城下めぐり町民ツアー」として、兼山町長・議長はじめ一般公募の町民ら48人が津山市を訪問。

○平成8年4月14日

妙向尼400回忌記念の妙願寺本堂の落慶法要に兼山町長・議長が出席。

○平成8年6月15日・16日

津山市から歎異鈔に聞く会歴史部会メンバー22人が、研修旅行で兼山町を訪問。

○平成9年（1997）2月15日

兼山町長・教育長が津山市訪問、妙願寺住職森氏の著書出版祝賀会に出席。

○平成13年（2001）7月18日

兼山町から同町老人クラブ連合会の観光ツアーとして、兼山町長・教育長はじめ総勢42人が津山市を訪問。

○平成16年（2004）4月24日

津山城築城400年・市制施行75周年記念式典に、兼山町長・議長出席。

○平成16年10月3日

津山市から歎異鈔に聞く会歴史部会メンバー13人が、研修旅行で兼山町を訪問、津山市長のメッセージを兼山町長に手渡して交歓。

○平成17年（2005）2月9日・10日

兼山小学校5年生の児童22人が津山市の高倉小学校を訪問し交流。

○平成17年5月1日

可児市と兼山町の合併に伴う新可児市誕生記念式典に、津山市長の代理として助役が出席。

○平成18年（2006）6月8日  
可児市からの招請により、津山市長が可児市を訪問、可児市長・議長らと懇談。

○平成21年（2009）2月11日  
津山市制施行80周年記念式典に可児市より出席。

○平成22年（2010）5月  
津山市より市議会広報調査特別委員会メンバーが可児市を訪問。

○平成23年（2011）11月  
可児市より市議会建設経済委員会メンバーが津山市を訪問。

○平成24年（2012）5月6日  
可児市制施行30周年記念式典に津山市長・議長が出席。

○平成24年5月16日・17日  
津山市から歎異鈔に聞く会歴史部会メンバー15人が、研修旅行で可児市を訪問、津山市長の親書を可児市長に手渡しして懇談。

○平成27年（2015）2月28日  
津山市合併10周年記念式典に可児市長が出席。



津山市合併10周年記念式典

4. 友好交流20周年記念行事

—平成27年（2015）—



● 4月5日  
津山さくらまつり伝統芸能交歓会に、兼山の烏峰太鼓が出演。

● 11月21日・22日  
兼山町の関係者をはじめとする約30人の訪問団が津山市を訪問（予定）。



可成寺にて



可児市で特別展

● 5月29日・30日  
津山市長・議長をはじめとする32人の訪問団が可児市を訪問。「花フェスタ2015ぎふ・可児市ウィーク」の開会式にて市長による記念品交換が行われ、友好の絆を再確認。



花フェスタ会場にて



## 謝 辞

本誌の刊行にあたりご協力を賜りました皆様に、  
心より感謝申し上げます。  
(敬称略)

宇治市歴史資料館

可成寺

可児市

可児市教育委員会

常照寺

歎異鈔に聞く会歴史部会

名古屋市博物館

名古屋市秀吉清正記念館

兵庫県立歴史博物館

本源寺

松平 康

三河武士のやかた家康館

妙願寺

森 嵩正

兼山が生んだ戦国武将

### 森忠政と津山

—可児市と津山市—

歴史友好都市交流20周年—

発行日 二〇一五年 十月一日

発行者 津山市

〒七〇八・八五〇一  
岡山県津山市山北五二〇番地

編集 津山郷土博物館

印刷 有限会社 弘文社

〒七〇八・〇八四一  
岡山県津山市川崎一六八番地

本書の執筆は、歴史編を尾島治、交流編を小島徹が担当した。



## 市章の由来



可児市の「可」を近代的な感覚で図案化し、融和とかがりない躍進を表現しています。



旧津山藩の槍印。参勤交代に親藩松平家の威勢を示したもので、昭和7年に、これをかたちどって市章に制定しました。俗に「剣大（けんだい）」といいます。